

# 人口減少社会における地域のソーシャルキャピタルの傾向と対策： リソースジェネレータ調査を踏まえて

Trends and countermeasures of regional social capital in a society with a declining population:

Based on resource generator survey

栗島 英明<sup>1\*</sup>・中村 昭史<sup>2</sup>

Hideaki KURISHIMA<sup>1\*</sup> and Akifumi NAKAMURA<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 芝浦工業大学 建築学部

<sup>2</sup> 芝浦工業大学 SIT 総合研究所

<sup>1</sup>School of Architecture, Shibaura Institute of Technology

<sup>2</sup>SIT Research Laboratories, Shibaura Institute of Technology

## 摘 要

本稿では、リソースジェネレータ手法による調査事例を踏まえて、人口減少社会における地域のソーシャルキャピタル(SC)の傾向と対策について検討を行った。調査事例からは、手段のリソースだけでなく、表出的リソースがSCとして重要であること、地理的に近いつながりでなくてもリソースを得られること、高齢者のつながりが他の世代よりも弱いこと、単身世帯のつながりが家族世帯よりも弱いこと、地域によってリソースの獲得先が異なっていることが知見として得られた。以上より、今後の高齢者単身世帯の増加が、地域内のつながりが弱い都市部において地理的に近いつながりから得ることの多い介護や送迎などの物理的サポートの獲得を難しくする可能性があること、著しい人口減少と超高齢化が、地域内のつながりが重要なリソースの獲得先であった農山漁村においてSCに関する大きな問題となることが示唆された。こうした課題に対して、地域外のつながりを構築する間接的介入を行うこと、地縁以外の様々なコミュニティにアクセスできる場を用意すること、学校区やそれ以上の広範囲で地域内のつながりを構築することを対策として提案した。

キーワード：持続可能な地域、社会的ネットワーク、人口減少社会、  
ソーシャルキャピタル、リソースジェネレータ

Key words：sustainable region, social network, society with a declining population,  
social capital, resource generator

## 1. はじめに

### 1.1 持続可能な地域社会とソーシャルキャピタル

2018年に閣議決定された第五次環境基本計画(日本政府, 2018)においては、各地域がその特性を活かした強みを発揮し、地域ごとに異なる資源が循環する自立・分散型の社会を形成しつつ、異なる特性を持つ農山漁村や都市などがお互いに資源を補完し支え合う「地域循環共生圏」が提唱されている。また、重点戦略の「地域資源を活用した持続可能な地域づくり」においても、「地域資源の質を向上させ、地域における自然資本・人工資本・人的資本を持続可能な形で最大限活用することで、経済社会活動の向上につなげていく」というストックを重視した考え方が示されている。

こうした持続可能な社会の構築に関するストック重視の考え方は、世界的にも進んでおり、World Bank (1997)のGenuine SavingやUNU-IHDP and UNEP (2012)のInclusive Wealthなど、ストック重視の持続可能性指標が提唱されている。そうした中、Inclusive Wealthの科学顧問を務めるDasgupta (2007)は、「社会の生産的基盤が人口1人当たりで見たときに縮小していない場合、経済発展は持続可能であるといえる」とし、その生産的基盤として資本資産(自然資本、人工資本、人的資本)とともに、制度としてソーシャルキャピタル(social capital: 以下SC)を挙げている。2005年に閣議決定された「地域再生基本方針」でも、SCを「地域にとっての何よりの財産」とし、「地域固有の『ソーシャルキャピタル』」の活性化が地域再生の鍵になるとして

受付：2019年10月4日、受理：2019年12月26日

\* 〒135-8548 東京都江東区豊洲3-7-5, E-mail: kurikuri@shibaura-it.ac.jp

るなど、持続可能な地域社会の構築に必要不可欠なものとしている(日本政府, 2005)。

持続可能な地域社会の実現に向けて、SCがこれほど注目・期待される理由は、人々の協調行動がいわゆる「社会的ジレンマ」を乗り越えるなど、SCが社会における効率性を高め、住民の健康増進や医療費の低下、安全性の向上、政治活動への参加、環境配慮行動の実践などに影響し、人々の幸福度や地域の活性化につながるということが経験的にも、定量的にも論じられてきたためである(Putnam, 1993; Lin, 2001; Kawachi *et al.*, 2007; 近藤, 2005)。例えば、栗島ほか(2015)では、後述するリソースジェネレータ手法によるSCの測定結果と、居住する地域(小学校区)に対する愛着や個人的な主観的な幸福度に関わりがあるという結果が出ている。また、1995年の阪神大震災や2011年の東日本大震災などを通じて、災害のような非常時における信頼関係や人間関係の重要性が改めて認識されている。

## 1.2 多様な地域のソーシャルキャピタル

一方、「地域のつながりやコミュニティは衰退している」という話もよく語られている。ここで語られる地域のつながりは、空間的に集中し、多重的で、密度が高く、親族や隣人等の同質的で、強いつながりが前提となっており、それを見出せない場合に、地域のコミュニティは衰退した、とされている。また、日本国内では「人口減少や超高齢化、人口流動、職住分離といった社会の変化に伴って地縁的なつながりが希薄化し、地域のSCが衰退してきた」とも語られる。この場合も、特定の、閉じられた境界内の、アイデンティティや規範を共有する、地域共同体というものが想定されている。従来研究では、これを結合型(bonding)SCと呼ぶことが多い。

しかし、実際の人々のつながりやコミュニティは、非常に多様で複雑であり、例えば職場のコミュニティなど、様々な形態のものがある。したがって、そのつながりは、単一の連帯というよりは、まばらに編まれていて、かつ空間的に分散され、枝分かれした構造を持つものであると理解するほうがよい(Wellman, 1979)。そのような空間的・社会的に枝分かれしたつながりというのは、実際には連帯の中にいると得られないであろう情報や知識・知恵、資源を手に入れることも可能になる。よって、つながりとは、家族のつながりや近所や地域の人とのつながりだけでなく、仕事上のつきあい、学生時代の友人・知人、あるいはインターネットで知り合った同じ趣味の人なども含まれることになる。このようなつながりは地域や個人に対して新しい価値をもたらす可能性がある。従来研究では、これを橋渡し型(bridging)SCと呼ぶことが多い。

地域のSCというものを前者の結合型SCを前提として考えていくと、人口減少や超高齢化によって、物理的につながれる人の数や多様性にはどうし

ても限界がある。特に農村部はその傾向が強い。その一方で、交通手段や情報技術の発達によって、現代社会は物理的な境界に左右されないつながりの可能性も存在する。つまり、人口減少時代における地域のSCを、同じ地域に属さない人とのつながりも地域に関わる可能性のあるつながりと考える必要がある。近年注目される「関係人口」の議論(指出, 2016)も、人口減少時代における地理的に近くはないつながりの重要性を示唆している。

以上のように、地域のSCが持続可能な地域社会の構築に必要な不可欠であるとされる一方で、人口減少社会においては従来型の地理的に近い密なコミュニティに関する議論だけでは十分ではない点を鑑み、本稿では、リソースジェネレータ手法によるSCの調査事例から得られた結果を踏まえて、人口減少時代の地域のSCの傾向と対策について考える。

## 2. ソーシャルキャピタルの調査手法

### 2.1 ソーシャルキャピタルの定義

SCの調査には、多くの課題がある。第一に、SCの概念自体のあいまいさの問題である。日本では、Putnam(2000)の「人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることができる『信頼』『規範』『ネットワーク』といった社会的仕組みの特徴」という共有財としてのSCの定義が多く知られているが、Lin(2001)は「特定目的の行為にアクセスし、活用する社会的ネットワークに埋め込まれた資源」と、私的財としてSCを定義している。このようにSCの定義や期待される効用は様々であり、そのような定義が定まらない状況では何を対象に調査を行えばよいか不明確となる。

そこで著者らは、SCを「社会における人々の持つ人間関係(社会的ネットワーク)と、そこから得られる直接的・波及的な効用」と定義する。もちろん、Portes(1998)が指摘するようにSC(特に結合型SC)には負の側面も存在する。ただし、それは社会の持続可能性に関わる他のストックでも同様であって、SCのみが負の側面を持つわけではない(例えば、老朽化した人工資本は負のストックともいえる)。持続可能な地域社会の実現という観点では、健全なストックの継承というストックのプラス面が重要であるため、まず効用の部分のみを考えることとする。

### 2.2 改良型リソースジェネレータ手法

SC調査のもう一つの課題は、測定の問題である。第一の問題に起因し、SCは様々な指標で測定されてきた。例えば、知人の数や近隣との付き合いの程度、地縁組織への参加度などである。しかし、これでは先に定義した社会的ネットワークの生み出す効用を直接測定していないほか、住民の近隣での関係だけが暗黙のうちに強調されてしまうといった問題がある。また、その測定のスケールも、国、州、都



道府県, 市町村, 集落, 個人など様々であった。

いくつかの測定手法から, 著者らは Van del Gaag and Snijders(2005)が開発したリソースジェネレータ手法を採用した。同手法は, 30程度の他者に協力を依頼するような具体的な項目(リソース)のチェックリスト(以下, リソースリスト)を用意し, その協力を得られる知人の有無や関係性について質問を行い, 回答者がアクセス可能なSCの種類を測定するものである。つまり, 回答者がリストにある具体的な効用に社会的ネットワークを介してアクセスできているかを測定するものであるため, 先に定義したSCを測定するのに妥当な手法といえる。なお, Van del Gaag and Snijders(2005)などの従来研究では, 研究者が専門的な知見をもとにリソースリストを作成してきたが, より地域の特性を反映させるために, 多様な世代の住民へのグループインタビュー(以下, つながり座談会)を元に作成することとした。なお, この手法を著者らは改良型リソースジェネレータ手法と呼んでいる。

研究者がリソースリストを作成する従来型のリソースジェネレータ手法による調査を2014年2月に千葉県市原市で, 改良型リソースジェネレータ手法による調査を2016年2月に千葉県八千代市, 2017年2月に千葉県館山市, 2018年5月に鹿児島県西之表市で実施した。市原市については栗島ほか(2015)で, 八千代市についてはKurishima *et al.* (2017)で, 館山市については田中ほか(2017)で分析を行っている。以下では, 西之表市の事例を中心としつつ, 千葉県の3市の事例から得られた知見についても併せて述べる。

### 3. 地域のソーシャルキャピタルの現状：西之表市調査を中心に

#### 3.1 「つながり」に求めるもの

つながり座談会の主たる目的は, リソースリスト作成のためのリソース項目の抽出であり, これまでに八千代市(2015年8月), 館山市(2016年8月), 西之表市(2018年2月)の3市で実施した。座談会では, 各自治体の地域特性を反映するために, 座談会参加者として当該自治体に在住もしくは出身の住民を公募で募集した。また, 創発的な効果を期待できる1グループ5~6人のフォーカスグループインタビュー形式を採用し, 特定の世代・年齢に偏らないようにグルーピングを行った。

参加者には, 「これまでの人生で, 親族や近所の人, 友人, 知人とのつながりの中で, プラスになったこと」を当日までに考えてきてもらい, 座談会の最初に発表してもらった。このとき, 単に他の参加者の話を聞くだけでなく, 類似・関連する経験がある際にはそれを発表してもらった。発表された内容をホワイトボードに書き出し, 参加者で共有した。

次に, 書き出されたホワイトボードを見ながら, 「将来に残したい, 復活させたい, あるいは新たに築きたいつながり」を参加者に話し合ってもらった。なお, 将来の状況を想像してもらうため, 2040年頃の自分と家族の状況を予め考えてきてもらうとともに, 当該地域の未来カルテ(倉阪, 2018)について説明した。これまで実施した3市の座談会で得られた知見をまとめると以下ようになる。

まず, 参加者から出されたリソース項目は, 「病気や障害を抱えた時に介護, 看病などをお願いできる」「スーパーなどでお金が足りない時に立て替えてくれる」などの物理的・金銭的サポート, 「地域のお店や病院などの情報を教えてくれる」「自分や家族の仕事を紹介してくれる」などの情報・知識提供, 紹介・仲介, といった「手段的(instrumental)リソース」(星・桜井, 2012)と, 「悩みや愚痴を聞いてもらい, 気が楽になる」「いつも応援したり, 励ましてくれる」などの精神的サポートや, 「ありのままの自分を受け入れてくれる」「野菜や魚などをおすそわけしてくれる」などの所属感といった「表出的(expressive)リソース」(星・桜井, 2012)の2つに大別された。また, 参加者からは, 手段的リソースよりも表出的リソースの方が多く出された。これは手段的リソースの多くが, 様々なサービス(介護サービス, 家事代行, タクシーなど)やインターネットの普及(情報検索, 商品購入など)によりある程度の代替が可能である一方で, 表出的リソースは知人や友人というネットワーク以外からの獲得が難しいことが理由と考えられる。従来研究においてリソースリストに挙げられた項目は手段的リソースがほとんどであり, 表出的リソースは含まれていなかったが, 現代の日本においてはSCとして表出的なリソースを検討する必要があるということが座談会を通じて確認された。

次に, 家族, 近所の人, 友人のような深いつながりからの効用はもちろんのこと, 「近所の子供から挨拶されて元気が出た」「犬の散歩でよく会う人からよい動物病院を紹介された」など, あまり深い付き合いではない(面識はあるが, 名前は知らない)人からのリソースも多く出された。こうした「弱い紐帯(weak ties)」(Granovetter, 1974)からの効用も無視することはできない。

つながり座談会で抽出されたリソースを踏まえて, 手段的リソースと表出的リソースのバランスを考慮しながら, リソースリストを作成した。表1に西之表市で作成したリソースリストを示す。A~セが日常的な手段的リソース, ソ~フが日常的な表出的リソース, ヘとホが非常時のリソースである。

#### 3.2 「つながり」の傾向

西之表市での改良型リソースジェネレータ手法によるアンケート調査は, 2018年4月25日~5月11日にかけて, 層化無作為抽出した西之表市在住の

表1 西之表市で作成したリソースリスト。

	リソース項目	リソースの種類	
ア	あなたが病気や障害を抱えた時に介護、看病などをお願いできる	物理的・ 金銭的 サポート	手段的 リソース
イ	一時的(半日～2日程度)に留守にするときに、家族、ペット、庭木の世話を頼める		
ウ	(仕事や家事などを)手伝いをお願いできる		
エ	あなたや家族を車で送迎してくれる		
オ	使わなくなったものをあなたや家族に譲ってくれる		
カ	スーパーなどでお金が足りない時に立て替えてくれる		
キ	保証人になることを頼める		
ク	地域の生活に役立つ情報(美味しいお店、安売りのお店など)を教えてくれる	情報・ 知識提供 紹介・仲介	
ケ	評判の良い病院を教えてくれる		
コ	自分とは異なる価値観や経験を持っている		
サ	状況に応じた適切なアドバイスをしてくれる		
シ	島内や島外に友人・知人がたくさんいる人		
ス	パソコンや携帯電話(スマートフォン)のトラブルが起きた時に相談できる		
セ	お金に関する情報(保険や投資、税金、ローンなど)をアドバイスしてくれる		
ソ	悩みや愚痴を聞いてくれて、気持ちが楽になる。	精神的 サポート	表出的 リソース
タ	日常的にあなたや家族を気にかけてくれる(見守ってくれている)		
チ	一緒に趣味を楽しんだり、体を動かしたりする		
ツ	自分ことを必要としてくれる		
テ	あなたの良いところも悪いところも尊重してくれる(受け入れてくれる)		
ト	あなたにやる気や刺激を与えてくれる		
ナ	あなたのことを応援したり、励ましてくれる		
ニ	よく食事や飲みに誘ってくれる	所属感	
ヌ	世代や性別、出身、立場などを超えて付き合い合ってくれる		
ネ	あなたが特にお願ひしなくても、自発的にいろいろ手伝ってくれたり、助けてくれる		
ノ	下の名前やあだ名で呼び合う		
ハ	野菜や魚などをおすすめしてくれる		
ヒ	地域の自然や歴史、風習などについて一緒に話をする		
フ	会ったら声をかけてくれる		
ヘ	災害時の避難場所や安否確認方法の情報を共有している	非常時	
ホ	家屋に被害が出た時に修理を手伝ってくれる人		

20歳以上男女1,281人を対象に実施し、822人から回答を得た(回収率68.2%)。

表2に西之表市の各リソースの獲得率と獲得先を示す。獲得率とは、各リソースにアクセスできる(「そのような知り合いがいる」と回答した者の割合)である。また、獲得先として「同居」「近所」「校区内」「市内」「市外(種子島内)」「島外」の6つを設定している。各リソースの獲得率は概ね高く、獲得率が80%を下回ったのは、表1のオ・カ・キ・シ・ス・セ・チ・ヒであった。また、リソースによって獲得先が異なっている。手段的リソースでは、ア・イ・ウ・エ・カ・キのような物理的・金銭的な負担が伴うものが「同居」からの獲得が相対的に多い一方で、ク・ケ・コ・サなどの情報提供・紹介仲介はそれ以外からの獲得も多くなった。また、表出的リソースは、様々な獲得先からリソースを得ていることがわかった。こうした傾向は、市原市、八千代市、館山市の調査でも同様であった。

図1に西之表市の性別・年代別・世帯構成別のリソースの平均獲得数(30のリソース項目のうち、平均いくつのリソースを獲得しているか)を示す。併せて、表3に西之表市の性別・年代別・世帯構成別・移動歴別の各リソースの獲得率を示す。なお、表3では、カイ二乗検定を用いて、各属性の獲得率に有意差があるかを検証している。まず、女性は男性よりもリソースの獲得が多いことがわかった。これは、他の3市も同じ傾向であったが、西之表市の場合、平均獲得数の男女差は他の3市ほどは大きくなかった。個別にみると、ア・サ・ス・ソ・テで女性の獲得率が男性の獲得率を有意に上回っていた。

年代別では、60歳以上で他の年代に比べて有意に平均獲得数や獲得率が低下することが確認された。高齢者の平均獲得数や獲得率が低下する要因としては、子どもの独立や配偶者との死別などによって同居者からのサポートが減少するとともに、自身

表2 西之表市における各リソースの獲得先と獲得率。(リソースは表1を参照)

	獲得率	獲得先別獲得率					
		同居	近所	校区	市内	市外	島外
ア	92.3	55.6	13.9	10.9	20.5	7.9	19.0
イ	88.3	40.2	40.8	18.2	21.2	7.1	3.6
ウ	85.7	44.5	29.1	19.5	23.5	8.3	3.4
エ	87.8	39.3	34.8	23.1	26.1	7.3	3.6
オ	71.4	10.9	24.2	23.1	27.4	9.0	18.2
カ	75.2	34.4	24.8	19.5	26.3	7.1	4.9
キ	77.1	31.0	16.5	13.7	24.2	7.7	21.4
ク	89.8	21.1	41.0	37.4	45.7	13.3	6.2
ケ	88.3	17.9	35.3	32.1	48.3	16.5	20.9
コ	83.8	19.5	30.3	33.1	41.0	19.0	29.7
サ	83.8	25.6	24.6	24.8	32.5	12.4	24.8
シ	66.0	11.5	14.5	19.7	25.9	14.3	20.5
ス	78.9	21.8	19.4	16.7	32.9	9.6	18.8
セ	63.2	16.0	10.5	12.2	26.3	7.9	18.4
ソ	89.3	30.3	31.4	26.3	40.4	13.0	30.1
タ	92.1	29.5	40.6	26.9	38.2	14.1	28.8
チ	79.1	24.1	24.6	28.4	32.9	11.1	10.5
ツ	83.8	38.7	27.4	23.9	30.3	12.8	21.1
テ	85.9	40.4	22.9	22.0	31.6	11.7	26.1
ト	83.3	31.0	23.3	24.4	34.4	13.2	27.6
ナ	89.3	38.9	28.6	26.9	37.4	13.7	31.0
ニ	81.2	16.0	22.9	28.0	43.4	10.9	10.9
ヌ	84.0	15.0	31.6	30.6	42.7	19.2	27.4
ネ	82.3	25.0	29.5	24.1	28.4	11.7	12.6
ノ	89.5	24.1	37.6	38.2	49.1	20.7	30.6
ハ	91.2	8.6	57.7	37.8	42.5	13.7	8.8
ヒ	72.6	17.3	32.1	28.4	30.6	10.5	7.9
フ	98.5	18.8	65.4	50.8	57.3	29.7	17.3
ヘ	94.2	36.8	48.3	34.0	41.7	19.7	35.5
ホ	86.8	24.4	44.4	31.0	40.6	13.7	9.2

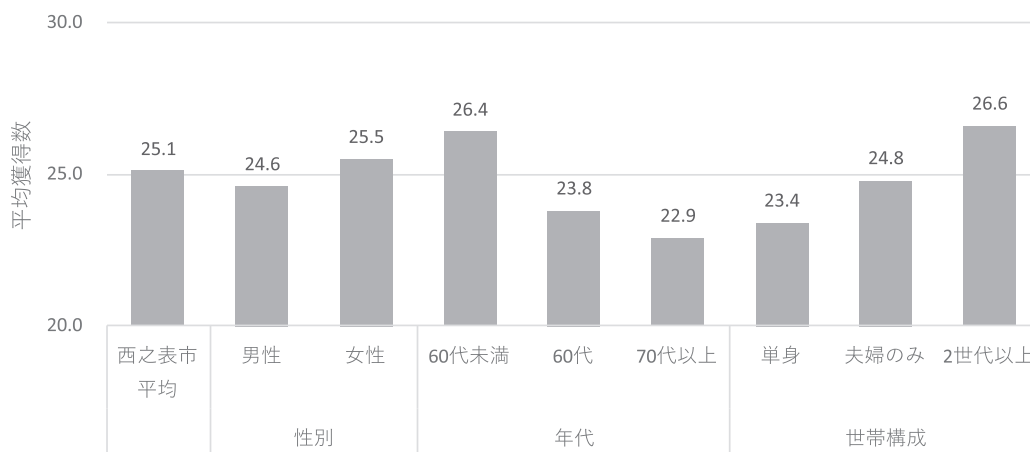


図1 西之表市における性別・年代別・世帯構成別のリソースの平均獲得数.

の健康等の理由から地理的に近くない人との関係も少なくなっていることが原因と考えられる。ただし、千葉県での調査において平均獲得数・獲得率の著しい低下が見られるのが70歳以上であったことを考えると、西之表市の60代での平均獲得

数・獲得率の低下は気になるところである。個別にみると、ケ・コ・サ・シ・ス・セの情報提供・紹介仲介、チ・ツ・テ・トといった精神的サポートの60歳以上の獲得率が有意に低い。先述のように、これらのリソースは地理的に近くない人からの獲得

表3 西之表市における性別・年代別・世帯構成別・移動歴別の各リソースの獲得率。(リソースは表1を参照)

	性別		年代別							世帯構成			移動歴		
	男性	女性	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	単身	夫婦のみ	2世代以上	転出なし	Uターン	移住	
ア	87.5	<b>92.6</b>	90.9	94.6	90.0	89.2	89.3	91.4	<u>82.6</u>	<b>96.2</b>	92.4	93.3	89.6	82.7	
イ	87.5	89.2	87.9	91.1	91.1	90.0	85.2	87.7	<u>79.0</u>	90.8	<b>93.2</b>	89.3	91.6	80.8	
ウ	82.8	88.2	90.9	92.9	92.2	83.3	<u>80.5</u>	85.2	<u>72.5</u>	90.0	<b>92.8</b>	90.6	87.6	78.8	
エ	84.9	90.2	93.9	<b>98.2</b>	93.3	<u>82.5</u>	<u>83.2</u>	88.9	<u>79.7</u>	89.2	<b>92.8</b>	90.6	89.2	82.7	
オ	67.7	72.7	78.8	<b>89.3</b>	<b>90.0</b>	67.5	<u>61.7</u>	<u>53.1</u>	<u>58.7</u>	66.2	<b>81.4</b>	69.8	70.7	67.3	
カ	70.7	77.1	84.8	<b>89.3</b>	80.0	74.2	69.1	<u>63.0</u>	<u>64.5</u>	73.8	<b>82.3</b>	73.2	73.9	76.9	
キ	74.6	79.1	75.8	85.7	83.3	76.7	74.5	70.4	<u>64.5</u>	78.5	<b>84.8</b>	77.2	79.5	73.1	
ク	89.7	90.2	93.9	94.6	95.6	90.0	85.9	86.4	87.7	90.8	91.6	89.9	88.0	92.3	
ケ	87.9	88.9	93.9	<b>100.0</b>	91.1	90.8	<u>82.6</u>	82.7	86.2	87.7	91.6	84.6	88.0	90.4	
コ	85.3	82.8	93.9	<b>94.6</b>	<b>93.3</b>	86.7	<u>77.9</u>	<u>69.1</u>	81.2	78.5	<b>89.9</b>	80.5	82.7	90.4	
サ	<u>78.9</u>	<b>87.5</b>	<b>97.0</b>	91.1	<b>95.6</b>	87.5	<u>73.2</u>	<u>74.1</u>	<u>76.8</u>	79.2	<b>90.3</b>	87.9	80.3	<b>82.7</b>	
シ	65.9	66.0	<b>93.9</b>	76.8	74.4	67.5	<u>58.4</u>	<u>49.4</u>	64.5	60.0	71.7	63.1	62.2	82.7	
ス	<u>75.0</u>	<b>82.2</b>	90.9	85.7	<b>91.1</b>	83.3	<u>72.5</u>	<u>61.7</u>	<u>73.2</u>	76.2	<b>84.8</b>	73.8	77.1	82.7	
セ	<u>57.8</u>	<b>67.3</b>	78.8	73.2	71.1	63.3	<u>55.7</u>	54.3	58.0	61.5	68.4	67.1	62.2	61.5	
ソ	<u>84.5</u>	<b>92.9</b>	97.0	94.6	<b>95.6</b>	90.8	85.2	<u>80.2</u>	84.8	89.2	92.4	89.9	89.6	84.6	
タ	90.9	93.3	93.9	96.4	95.6	90.8	89.9	91.4	<u>86.2</u>	91.5	<b>96.2</b>	91.9	92.0	94.2	
チ	78.0	80.1	84.8	87.5	<b>87.8</b>	78.3	<u>73.2</u>	74.1	74.6	83.1	79.7	77.2	79.1	76.9	
ツ	82.8	84.8	87.9	<b>94.6</b>	<b>92.2</b>	83.3	81.2	<u>71.6</u>	<u>77.5</u>	83.1	<b>89.5</b>	87.9	81.5	82.7	
テ	<u>82.3</u>	<b>88.6</b>	87.9	<b>98.2</b>	<b>95.6</b>	86.7	<u>79.9</u>	<u>75.3</u>	<u>79.0</u>	80.8	<b>92.4</b>	85.2	86.3	84.6	
ト	80.2	85.9	90.9	91.1	<b>92.2</b>	86.7	<u>76.5</u>	<u>72.8</u>	<u>76.8</u>	79.2	<b>90.3</b>	81.9	82.3	90.4	
ナ	88.4	89.9	93.9	92.9	94.4	89.2	87.9	81.5	<u>83.3</u>	88.5	<b>92.8</b>	88.6	90.4	90.4	
ニ	80.6	81.8	90.9	<b>92.9</b>	87.8	85.8	<u>74.5</u>	<u>67.9</u>	78.3	76.9	<b>86.5</b>	83.2	76.7	86.5	
ヌ	83.6	84.5	93.9	87.5	88.9	86.7	81.9	<u>72.8</u>	<u>79.0</u>	80.8	<b>89.9</b>	83.9	83.5	88.5	
ネ	81.9	82.8	93.9	<b>96.4</b>	<b>91.1</b>	79.2	<u>75.8</u>	75.3	<u>76.1</u>	79.2	<b>89.5</b>	81.2	81.9	86.5	
ノ	89.7	89.2	90.9	92.9	93.3	91.7	85.9	85.2	85.5	89.2	92.4	88.6	91.2	90.4	
ハ	89.2	92.6	81.8	94.6	94.4	89.2	92.6	88.9	88.4	90.0	94.5	91.9	92.4	92.3	
ヒ	71.1	73.4	78.8	67.9	70.0	75.8	73.2	69.1	70.3	73.8	73.4	77.2	72.3	76.9	
フ	99.1	98.0	<u>93.9</u>	100.0	97.8	100.0	99.3	96.3	97.8	99.2	98.3	98.7	98.4	98.1	
ヘ	94.8	93.9	90.9	100.0	98.9	91.7	92.6	93.8	91.3	93.8	96.2	94.0	93.2	96.2	
ホ	89.2	85.2	87.9	94.6	<b>93.3</b>	90.8	<u>80.5</u>	80.2	<u>80.4</u>	85.4	<b>93.2</b>	89.3	85.9	86.5	

カイ二乗決定の結果： 下線：5%水準で有意に少ない 太字：5%水準で有意に多い

も多いことから、60歳以上の高齢者の地理的に近くない人とのつながりが弱い可能性がある。一方、ヌ・ノ・ハ・ヒ・フといった所属感のリソースはそれほど低くないことから、地理的に近い人々とのつながりは維持されているものと推察できる。

世帯人員別でみると、世帯人数が少ないほどリソースの平均獲得数が少ないことが確認された。この傾向は千葉県内の3市での調査でも同様である。個別にみても、ア・イ・ウ・エ・オ・カの物理的サポート、ソ・タ・ツ・テ・ト・ナの精神的サポートの獲得率が低くなっている。先述のように、物理的サポートは同居からの獲得が多いため、単身世帯の獲得率が低いと考えられる。一方、精神的サポートは地理的に遠いつながりからも獲得できるリソースであるが、その獲得率が低いことから単身者は悩み等を

相談できるつながりが少ないことを指摘できる。

移動歴については、館山市の事例では、地域内外の両方のつながりを有しているUターン者が市外転出の経験がない者よりもリソースの平均獲得数が多かった(田中ほか, 2017)が、西之表市では移動歴による平均獲得数や獲得率の差は確認できなかった。後述するように、西之表市は、千葉県の3市に比べ、地理的に近い人々(「近所」「校区内」「市内」)からのリソースの獲得が多いことがその理由と考えられる。

### 3.3 「つながり」の獲得先

表4に西之表市、八千代市、館山市の全体の平均獲得数と獲得先ごとの平均獲得数を示す。獲得先ごとの平均獲得数とは、30のリソースのうちその獲得先から獲得したリソースの平均数である。なお、つながり座談会をもとにリソースリストを作成



表4 西之表市, 八千代市, 館山市におけるリソースの獲得先.

	平均 獲得数	獲得先					
		同居	近所	校区内 (地区内)	市内	市外	
						島内	島外
西之表市	25.1	8.0	9.1	7.9	10.3	3.8	5.4
八千代市	22.6	13.9	7.2	5.8	6.2	11.8	
館山市	22.8	13.5	6.8	6.2	7.3	7.8	

する改良型リソースジェネレータ調査では、30のリソースが地域によって異なるため、単純な比較はできない<sup>注)</sup>。そのため以下の比較は、平均数そのものよりも、どういった獲得先からリソースを得ているか、という傾向の違いの把握が目的である。また、市原市の調査は、表出的リソースをリストにほとんど含まず、他の3市とは比較が難しいために、比較対象から外した。

まず、西之表市では、「同居」よりも「近所」「校区内」「市内」の平均獲得数が多く、地域内のつながりが強いことが読み取れる。その一方、「市外」の平均獲得数はそれほど多くはない。西之表市は、離島という条件から島外との往来が限られており、台風等で何日も本土から孤立することも少なくない。また、市内には島外からの移住(江戸・明治・大正・昭和)集落もいくつか存在する。こうしたことから、まず頼れるつながりは、地理的に近い人々とのつながりである。人口減少が進んでいる今もなお集落対抗の校区運動会なども行われており、たとえ同じ校区内でも別の集落に移ると「出郷者」と呼ばれるなど、集落内のつながりが強い。また、住民の活動状況を調べ、活動が重なり交流が生まれそうな拠点を「サロン」として整備するなどの運動を進めている集落も複数存在している。こうしたことが、地理的に近い人々とのつながりが強い傾向につながっていると予想される。

八千代市では、「同居」の平均数が最も大きく、次いで「市外」となっていることから、市外へのつながりが「近所」「市内」「校区」といった地理的に近いつながりよりも強いことが読みとれる。八千代市は、東京大都市圏のベッドタウンとして発展してきた地域であり、八千代市以外の出身者であったり、職場や学校が市外であったりすることが多い。また、公共交通機関や自家用車での他地域への移動も容易である。こうしたことから、市外へのつながりが強いものと予想される。

館山市では、「同居」が最も多く、その他の平均獲得数にはそれほど違いはない。同じく千葉県に位置する八千代市と比べて市外の平均獲得数が多い理由は、館山市が東京大都市圏の外縁部に位置する地方都市で、八千代市に比べると市外からの流入が少ないためと考える。つまり、市外へのつながりを有する者が、Uターン者を除くとそれほど多くな

いことが理由と考えられる。また、西之表市に比べると地理的に近い人々とのつながりも強いとは言えない。これは、離島に位置する西之表市ほどの他地域との隔絶性がないことや、八千代市同様に必要以上に他者に干渉しない(都市的な)つながりが志向されていることが理由として考えられる。

#### 4. 人口減少時代の地域のソーシャルキャピタル

以上のリソースジェネレータ手法を用いた調査事例の結果をまとめると以下ようになる。

調査事例に共通する傾向としては、物理的・金銭的サポートや情報・知識提供・紹介仲介などの手段のリソースだけでなく、精神的サポートや所属感といった表出的リソースがSCとして重要であること、物理的・金銭的サポートを除けば、必ずしも地理的に近いつながりでなくても得られること、男性のつながりが女性よりも弱いこと、高齢者のつながりが他の世代よりも弱いこと、単身世帯のつながりが家族世帯よりも弱いことが挙げられる。また、事例によって、リソースの獲得先が異なっており、西之表市では「近所」や「校区内」などの地理的に近い人々とのつながりから、八千代市では「同居」と「市外」のつながりから、館山市では「同居」のつながりからのリソースの獲得が多い傾向が見られた。加えて、館山市では、地域内外のつながりを持つUターン者のリソース獲得数が多かった。これらの傾向を踏まえ、人口減少社会における地域のSCについて検討する。

まず問題となりうるのが、さらなる人口減少と超高齢化である。国立社会保障・人口問題研究所(2018a)によれば、西之表市では2045年の人口は2015年の58.2%に、館山市でも70.2%となると推計されている。また、著者らの研究グループでは、西之表市において2045年の空家率が50%を超える校区は、全12校区中8校区となると予測している。集落のつながりが強い西之表市では、これまで「近所」「校区内」「市内」といった地理的に近い人々とのつながりが重要なリソースの獲得先であったが、それが失われてしまう可能性がある。さらに、2045年の高齢化率は、西之表市で47.5%、館山市で47.1%、市原市で37.3%、八千代市で35.1%になると推計されている(国立社会保障・人口問題研究所、

2018b)。先述のように、高齢者はリソースの平均獲得数や獲得率が低く、西之表市の事例では物理的サポートだけでなく精神的サポートも高齢者の獲得率が低かった。また、高齢化が進むと老々介護のようにサポートをする側も受ける側も高齢者という状況が起こりうる。こうした状況は、非常に脆弱であると考えられる。

一方、八千代市(2045年人口が2015年比92.4%)のように人口減少が比較的少ない地域でSCに関わる問題が生じないのだろうか。しかしながら、状況はそれほど単純ではない。問題となりうるのが、高齢者の単身世帯が増加を続けており、今後さらに増加すると予測されている点である。国立社会保障・人口問題研究所(2018b)によれば、2015年時点で世帯主が65歳以上の「高齢世帯」は36.0%、そのうち単身世帯が32.6%、65歳以上高齢者の独居率は18.5%(75歳以上では20.6%)である。それが、2040年には「高齢世帯」は44.2%となり、そのうち単身世帯が40.0%、65歳以上高齢者の独居率も22.9%(75歳以上では22.9%)となると推計されている。先述のように、高齢者と単身世帯のリソースの平均獲得数や獲得率が低い。特に、高齢者にとって必要となる介護や送迎などのリソースは「同居」や「近所」など地理的に近いつながりから獲得されているが、単身世帯では「同居」からのサポートはない。また、高齢者の単身世帯はベッドタウンとして開発された郊外で著しく増加することが予測されているが、地理的に近いつながりからのリソースの平均獲得数が少ない八千代市の事例を見る限り、こうした地域では「近所」からのサポートも期待できない可能性がある。

それでは、こうした人口減少時代におけるSCの問題に対してどのような対策が考えられるのか。人口減少や超高齢化を止めることは極めて困難であり、短期的に改善できる対策はない。こうした中で、調査事例から得られた知見を踏まえるならば、まずは「はじめに」で述べたように、SCを地理的に近い結束型SCだけで捉えないことである。調査事例では、手段的リソースのうち情報提供・紹介仲介、表出的リソースのうち精神的サポートについては、地理的に近いつながり以外からも獲得していた。つまり、人口減少が進む中でも、様々なつながりを構築することである程度は必要なリソースを得ることができる。もちろん、人々の社会関係が基礎となるSCの形成には、外部からの直接的介入はできないため、制度や組織づくり、空間整備や教育等を通じた間接的介入が必要である。例えば、著者らの研究グループでは、西之表市などで中高生を対象に「未来ワークショップ」(倉阪, 2017)やそれを用いた教育プログラムを実践しているが、それによって中高生の西之表や種子島に対する愛着を高まったことが確認されている(宮崎, 2019)。彼らの多くはいずれ進

学や就職時に地域を出ていくが、彼らの中にその後も何らかの形で地域や地域に住む人々との関係を持つようとする意識が芽生えれば、地域に残らなくてもそれは重要なSCとなる。

また、表出的リソースのうち所属感については、これまでは地域のコミュニティがその役割を担っていたが、著しい人口減少により困難となりつつある。しかし、地縁的でないコミュニティ(趣味のグループ、目的を同じくするグループ、NPOなど)でも所属感をもたらすことは可能である。したがって、そうした様々なコミュニティにアクセスできる場(仮想的な場も含む)を間接的介入として提供していくことが必要である。

一方で、手段的リソースのうちの物理的サポートについては、どうしても地理的に近いつながりに頼ることとなる。つまり、地理的に近いつながりの維持・強化も必要であるし、先述の老々介護のような脆弱な状況を避けるためにも異なる世代間のつながりの構築が重要である。ただし、そうした地理的に近い多世代のつながりを近所や集落レベルで構築することは、人口予測からも困難となることが予想される。現在各地で進められている集落レベルでの居場所・サロンづくりに加え、校区やそれ以上の広範囲(例えば基礎自治体レベル)での間接的介入について、その事例分析や具体的な政策の検討がこれからの課題である。

## 謝 辞

本稿は、JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域「多世代参加型ストックマネジメント手法の普及を通じた地方自治体での持続可能性の確保」(代表：倉阪秀史 平成26～令和元年度 JST-RISTEX)及び環境研究総合推進費2-1910(代表：倉阪秀史 平成31～令和3年度 環境再生保全機構)による研究成果の一部である。

## 注

注)西之表市の調査では、表1に示したように「リソースの種類」という上位概念を設け、各種類の具体的なリソースをつながり座談会を元に作成した。具体的なリソースの獲得率の比較は地域によって異なるためにできないが、リソースの種類ごとに得点化(偏差値化)することで地域間比較ができる。これにより地域の特性を反映させつつも、地域間比較が可能な手法となった。

## 引用文献

Dasgupta, P.(2007)*Economics: A Very Short Introduction*, Oxford University Press, Oxford.



- Granovetter, M. (1974) *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers*, The University of Chicago Press, Chicago.
- 星 旦二・桜井尚子(2012)社会的サポート・ネットワークと健康. 季刊社会保障研究, 48, 304-318.
- Kawachi, I., Subramanian, S. V. and Kim, D. (eds.) (2007) *Social Capital and Health*, Springer, New York.
- 近藤克則(2005)健康格差社会: 何が心と健康を蝕むのか, 医学書院, 東京.
- 国立社会保障・人口問題研究所(2018a)日本の地域別将来推計人口: 平成 27(2015)~ 57(2045)年. <http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/jinkokenshiryo340.pdf>(2019年9月30日確認)
- 国立社会保障・人口問題研究所(2018b)日本の世帯数の将来推計(全国推計): 2015(平成 27)~ 2040(平成 52)年. <http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/210291.pdf>(2019年9月30日確認)
- 倉阪秀史(2017)未来ワークショップ: 2040年の未来市長になった中高生からの政策提言. 環境情報科学, 46(4), 35-40.
- 倉阪秀史(2018)人口減少社会での資本基盤マネジメントに向けて: 未来シミュレータと未来カルテ. 公共研究, 14(1), 22-28.
- 栗島英明・佐藤 峻・倉阪秀史・松橋啓介(2015)Resource generator による地域住民のソーシャル・キャピタルの測定と地域評価との関連分析: 千葉県市原市を事例に. 土木学会論文集 G(環境), 71(6), II\_91-II\_98.
- Kurishima, H., Nakamura, A. and Kurasaka, H. (2017) Development of social capital management approach with resident participation using improved resource generator method. *Selected Conference Proceedings: 3rd International Conference on Urban Sustainability and Resilience*, 107-116.
- Lin, N. (2001) *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 宮崎文彦(2019)「にしのおもて未来ワークショップ」開催報告: 鹿児島県西之表市(種子島)における未来ワークショップ. 公共研究, 15(1), 271-279.
- 日本政府(2005)地域再生基本方針. <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/tiikisaisei/housin.pdf>(2019年9月30日確認)
- 日本政府(2018)第五次環境基本計画. <https://www.env.go.jp/press/files/jp/108982.pdf>(2019年9月30日確認)
- Portes, A. (1998) Social capital: Its origins and applications in modern sociology. *Annual Review of Sociology*, 24, 1-24.
- Putnam, R. D. (1993) *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press, Princeton.
- Putnam, R. D. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster, New York.
- 指出一正(2016)ぼくらは地方で幸せを見つける(ソトコト流ローカル再生論), ポプラ社, 東京.
- 田中紫織・栗島英明・中村昭史・時松宏治(2017)千葉県館山市におけるソーシャル・キャピタルの特性. 環境情報科学論文集, 31, 59-64.
- UNU-IHDP and UNEP(2012) *Inclusive Wealth Report 2012: Measuring Progress toward Sustainability*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Van del Gaag, M. and Snijders, T. A. B. (2005) The resource generator: social capital. *Social Networks*, 27, 27-44.
- Wellman, B. (1979) The Community Question: The intimate networks of east yorkers. *American Journal of Sociology*, 84, 1201-1231.
- World Bank(1997) *Expanding the Measure of Wealth: Indicators of Environmentally Sustainable Development*, The World Bank, Washington, D.C.



栗島 英明 / Hideaki KURISHIMA

1975年、愛知県生まれ。1998年に茨城大学教育学部を卒業後、2003年に筑波大学大学院地球科学研究科地理学専攻修了。博士(理学)。独立行政法人(現、国立研究開発法人)産業技術総合研究所ライフサイクルアセスメント研究センター研究員、芝浦工業大学工学部を経て、2018年より現職。専門分野は環境政策、都市地理学、持続性科学。元々は基礎自治体の廃棄物政策の評価等を行っていたが、最近は持続可能な都市・地域を実現するための各種研究(評価指標開発、ソーシャルキャピタル研究、消費者行動研究、地域人材育成プログラムの開発等)を進めている。



中村 昭史 / Akifumi NAKAMURA

1974年、宮崎県えびの市生まれ。筑波大学比較文化学類卒。筑波大学大学院地球科学研究科地理学専攻にて修士(理学)取得、同大学院生命環境科学研究科地球環境科学専攻単位取得退学。2014年より芝浦工業大学 SIT 総合研究所客員研究員。非常勤講師として芝浦工業大学、大東文化大学、東京都市大学等にて地理学・社会学分野の講義を担当。専門は都市・農村地理学、地域社会学、社会ネットワーク論。ネットワークと空間性の視点からソーシャルキャピタルの理論・方法論の検討、地域で実装可能な評価指標開発に取り組んでいる。

